The Japan Lung Cancer Society

示-121 癌発症高危険群，低危険群及び肺癌患者における末梢血リンパ球姉妹染色分体交換（SCE）及び血清ビタミンA値，同ビタミンE値の検討

北海道大学医学部第1内科
○原田真雄，堂坂弘俊，石黒昭彦，清水　透，磯部　宏
荒谷義和，伊藤正美，宮本　宏，川上義和

癌の発生においては多くの内因・外因が関与していると考えられる。我々は，3親等以内に悪性腫瘍患者が4人以上いる者を癌発症高危険群，全くいない者を癌発症低危険群とし，これらと肺癌患者の3群について，ベンツピレン誘発SCE頻度及び血清ビタミンA値，同ビタミンE値を検討した。癌発症高危険群健康人11人（11家系），低危険群健康人14人（14家系）及び未治療の肺癌患者15人の末梢血リンパ球をベンツピレンに暴露した。肺癌患者の自発SCE頻度は低危険群よりも有意に高かった。肺癌患者及び高危険群におけるベンツピレン誘発SCE頻度は低危険群に比し有意に高かった。次に，癌発症高危険群健康人21人（7家系），低危険群健康人13人（13家系）及び肺癌患者40人における血清ビタミンA値及び同ビタミンE値を測定した。血清ビタミンA値は，肺癌患者において癌発症高危険群及び低危険群よりも有意に低い値を示したが，血清ビタミンE値は3群間に有意差を認めなかった。

以上より，癌発症高危険群におけるベンツピレンに対する高感受性，肺癌担癌状態による高自発SCE頻度及び低血清ビタミンA値の可能性が示唆された。

示-122

肺腺癌発生と肺の脂質代謝

愛知県がんセンター臨床検査部，＊愛知医科大学
加齢医科学研究所
佐藤秩子，　＊田内　久

肺を一つの代謝臓器として考え，とくに脂質代謝と肺癌特に腺癌の発生との関連を形態分析により抽出すべく検討を続けて来ている．手術摘出肺癌例，非癌例の光顕未染色透徹切片の蛍光顕微鏡写真からの量的分析により，気管支上皮細胞内の自家蛍光色素顆粒の発現様相を比較検討した．

喫煙者は非喫煙者に比しやや多く（有意ではない），腺癌例では扁平上皮癌例に比し有意に多量に出現していることについては，既に報告したが，さらにこれに関連する実験をおこなった．SD雄ラット生後3週より，ビタミンE欠乏食（3％コーン油を含む），ビタミンE添加食（コーン油3%,18%）の3群に分け飼育し，4,12か月後剖検し各種臓器組織内の自家蛍光色素顆粒の量的分析をおこなった．E欠乏食12か月では，筋細胞に散発的崩壊とその部に自家蛍光色素顆粒の多量の発現を認めるが，腎，脾，肝などではむしろ高脂肪食群で多量に発現し，更に気管支上皮，小脳プルキンエ細胞では，脂肪摂取量，ビタミンEのいずれとも有意な関連を示さなかった．
肺胞上皮については検討中であるが，気管支上皮におけるほど通常で規則的に発現するものではなく　その分析には困難な問題がのこされている．

（喫煙科学研究財団研究助成金をうけた）

示-123

前縦隔悪性腫瘍の臨床的検討

長崎大学医学部第2内科[1]，同1外科[2]，同中央検査病理部[3]，国立療養所長崎病院[4]
峯　豊[1]，河野謙二[1]，岡三喜男[1]，神田哲郎[1]，斉藤　厚[1]，
原　耕平[1]，綾部公懿[2]，富田正雄[2]，津田暢夫[3]，藤田紀代[4]，植田保子[4]，河野浩太[4]

目的：前縦隔悪性腫瘍の鑑別診断上、有用な点を明らかにするため臨床的に検討した。
対象：1974年 1月から1985年12月までに、当教室及び国立療養所長崎病院に入院した前縦隔悪性腫瘍10例を対象とした。内訳は悪性胸腺腫 4例、悪性リンパ腫 2例、胚細胞性腫瘍 2例、（セミノーマ 1例、胎児性癌 1例）、カルチノイド 1例、扁平上皮癌 1例であった。
結果：年齢は24～80才。男女各 5例。胚細胞性腫瘍の 2例は共に24才、男性であった。症状は無自覚 4例、発熱 3例、胸痛、咳嗽、呼吸困難、全身倦怠感が各 2例、発汗、上大静脈症候群が各 1例であった。全身倦怠感、発熱などの全身症状は悪性リンパ腫で、発汗はカルチノイドでみられた。胚細胞性腫瘍では血清HCGの上昇がみられた。レ線上、悪性リンパ腫では多発融合傾向を呈していた。治療は手術のみ 3例、手術＋放射線 3例、手術（試験開胸）＋放射線＋化療 1例、化療のみ 1例、無治療 2例であった。生存は 5例、死亡 4例、不明 1例であった。セミノーマでは放射線治療、胎児性癌ではCDDPを主とした化療が有効で、現在 2例共生存中である。合併症は悪性胸腺腫の 2例で重症筋無力症がみられた。

示-124

前縦隔悪性腫瘍１７例の臨床的検討
ー特にＴＳＰＢ法の有用性についてー

関西電力病院呼吸器科
○桑原正喜、福瀬達郎、奥村典仁

前縦隔腫瘍の病理診断は、従来からParasternal，Suprasternalあるいは Paraxiphoid からのアプローチによる針生検や転移リンパ節生検、縦隔鏡をも含めての手術による生検が唯一のものであった。

我々はこの領域における病変の生検法として1984年から腹腔穿刺針を用いて局所麻酔下に胸骨を貫通して組織を採取するTranssternal punch biopsy （TSPB）法を開発し行っている。本法の有用性について検討した。

過去10年間に17例の前縦隔悪性腫瘍を経験した。内訳は男13例、女4 例で5 才から84才（平均44.2才）に及び病理診断は悪性胸腺腫9 例、悪性リンパ腫7 例、胸腺癌1 例であった。このうち11例(65%) は局麻下での生検によって組織診断が得られた。TSPB法開発前の症例12例中局麻下で生検を行った症例は6 例でその内訳は転移リンパ節生検5 例と転移皮下腫瘍生検1 例で残り6 例は全て手術による。そのうち4 例（66.7%)は試験切除となった。一方、TSPB開発後の症例5 例では全例に組織診断が得られ、その内訳は悪性胸腺腫2 例、悪性リンパ腫3 例でこのうち2 例に手術を施行し1 例(20%) が試験切除となった。他は放射線療法と化学療法を行った。TSPBによる出血や感染、縦隔血腫等は経験していない。また、腫瘍の播種も経験していない。

TSPBは従来のアプローチでは診断のつかない胸骨下の病巣の診断に優れており、本法により診断的な外科侵襲を避けることができる。手術的手段に代る前縦隔病変の生検法である。

NII-Electronic Library Service